アメリカ船来航情報

嘉永六年六月三日（一八五三年七月八日）に、浦賀沖にペリー提督が率いるアメリカ東インド艦隊が来航した。現在では突然の来航、しかも最新鋭の蒸気船が二隻含まれ、そのうえそれまで江戸湾に来航した異国船と違い、臨戦態勢であったことから「すわ！戦争だ」と砲艦外交の色合いが濃く伝えられている。

しかし、江戸幕府はオランダからの『別段風説書』によって来航情報をキャッチしており、浦賀奉行所の役人たちも正確な情報ではないが、来航を予測していた。

そのことは、ペリー艦隊が帰港した直後に、水戸藩士の海保帆平が藩主水戸斉昭の命によって作成したとされる（海保が作成したことを言及しているのは、明海大学の岩下哲典氏の『江戸の海外情報ネットワーク』による）『与力聞書』の中に見える。

『与力聞書』はペリー来航に直接携わった浦賀奉行所の与力五人から聞いた話であるので、かなり高い程度の信頼性がおける史料として扱われている。

ここで与力の樋田多太郎は「この度の異国船来航は、一昨年と思うがオランダ人からの通達があり、石炭置き場の土地の件と交易を願って来ることは承知していた」とオランダ人から「一昨年」は間違いであるが、しかるべき情報が来ていたことを示唆している。

樋田は続けて「しかしながら幕府は一向にこの準備をしない。一人筒井肥前守（政憲）のみ、来航に備えるべしと申していた。ようやく昨年（嘉永五年）暮になって江戸湾防備の四藩（川越・彦根・忍・会津）と浦賀奉行へ来航する旨の通達があった。浦賀奉行はそれでもなおこのことを隠し通した。今年（嘉永六年）二、三月になって、またしても筒井が来航のための準備を言ったが、多くの役人は異国船が来航しても、日本側の鉄砲を示せば、直ぐに逃げ帰るぐらいに思っており、（現実の状況をあまりにも知らないことに）嘆き悲しいことと思った」と記されている。

さらに続けて「オランダ人からの情報通り、上官の名前も船の数も一致しており、来航の時期が四月とされていたのが、六月に伸びただけ」と付け加えられている。

樋田氏の記述には多少の勇み足もあるが、奉行所の役

人の共通認識の部分もある。同じく与力の近藤良次は「この度の異国船来航は、オランダ人より通達のあったこと。しかし奉行所内に知らされたのは、「来夏来るかもしれぬ」程度のことで、準備不足からどのように対応してよいやら困ったと述べている。

『与力聞書』の中では来航情報のことを述べていない香山栄左衛門も、来航したペリー艦隊の様子を江戸詰の浦賀奉行・井戸石見守のところへ報告に行ったおり、「この度のアメリカ大統領（「国王」と表現している）からの書簡が江戸湾に来ることを幕府は知っていながら、我々に長崎へ行けなど言わせることは以ての外のこと」と憤り、さらに戸田奉行がすべて知っていたなら、きちんとした指示が欲しかったと言って、悔し涙を流したことが記されている。

こうして、与力連中は来航情報の公開がないことで、浦賀奉行所が混乱したことをしるしている。

しかし、浦賀奉行所では嘉永六年正月から五月いっぱい異国船来航に備えて、特別警備体制が敷かれていたが、五月を過ぎても異国船が来ないので、警備体制を解いて三日目にペリー艦隊が姿を見せた。この警備体制は奉行の許可なくやったことであろうか。とすれば役人たちにもある程度は来航が知らされていたことになろう。（了）